

## 中国訪問の印象

松岡信明\*

本誌第24号で紹介したように、当協会は中国との技術交流・共同研究を積極的に行う予定である。このため1995年9月に高島理事長が2、3の研究所・大学を訪問し計画を具体化するための協議を行った。筆者は理事長に随行し、協議に加わると同時に中国の研究所や大学の実情を視察した。今回はこの経験を通して感じられた中国の印象について述べてみたい。

### 1. 土地柄によって異なる 研究機関の実情

今回は次の三つの研究所と大学を訪問した。

- (1) 中国輻射防護研究院（山西省太原市）
- (2) 中国鉱業大学（北京市）
- (3) 山東鉱業学院（山東省泰安市）

輻射防護研究院は日本原子力研究所のような存在で、約1000名の研究者が11の部門で研究しており、ほとんど全員が家族とともに敷地内の団地に居住している。昼休みは夏季3時間、冬季2時間で、昼食は家庭でとり、昼寝の習慣もあるとのことであった。研究設備は最新のものもあるが、多くは一世代前のもので、整備して大事に使っている。このように研究や生活の様子はローカルで質素な印象

であったが、各部門には名門清華大学などの出身者が配属されており、多くの研究は世界的な水準にある。筆者には研究と生活のレベルのギャップが奇異に感じられた。お世話になった副院長の楊教授は40歳代前半で別格的に若かったが、各部門のトップは60歳に近く、人事面では年功序列が歴然としているようであった。しかし、序列はあっても日常会話は対等に近い形で行っている。極端な例では、副院長の楊教授と公用車の運転手が友達感覚で会話をしていた。これは同じ団地で日常生活を共にしていることによると思われるが、古い中国の良いところの一つであると感じた。

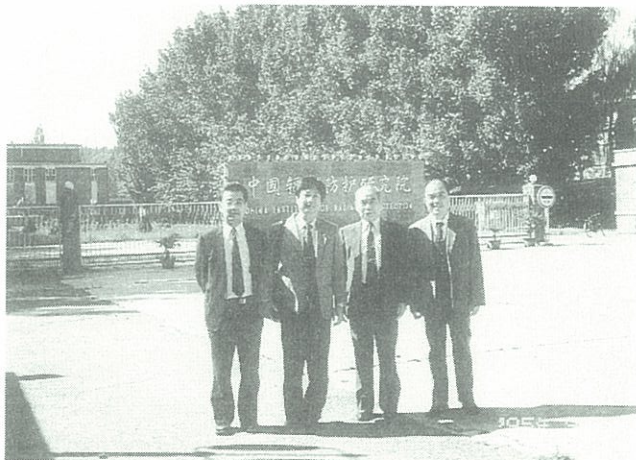
中国鉱業大学は大学院大学で、学部部門は江蘇省にあるとのことであった。農業大学、医科大学などの別の単科大学が隣接しており、これらを総合すると北京大学や清華大学並のシンクタンクである。副学長の謝教授と岩石力学が専門の何教授のお世話になったが、お二人とも米国帰りの30歳代のテクノクラートである。お話では、文化大革命の影響で40～50歳代の人材が不足しており、このため若い研究者が頭角を現しているらしい。両教授とも国内及び海外の学会の主要メンバーで、北京の大学や研究所の指導者達は研究レベルも交流も国際的であると感じられた。研

\* (財)九州環境管理協会 分析科学部次長

研究室では研究成果がパネルにまとめられており、所狭しと展示されている。研究費を獲得するためにはアピールが必要とのことで、この辺りにもアメリカナイズされた様子が窺える。

山東鉱業学院は名山「泰山」の麓にあり、周辺環境に恵まれた大学である。この大学は山東省に豊富に埋蔵される石炭の開発・利用を主目的として設立されたようである。日本との交流は古く、お世話になった田名誉教授は秋田大学のご出身であった。現在も日本との交流は活発で、外事部に日本語の堪能職員が配置されている。この大学は将来的には理科系の総合大学を目指しており、大学の名称も近々変更の予定とのことであった。背景には石炭だけでは学生が集まらないという事情がある。この点は、日本で鉱山関係各学科が「資源工学科」のような学科名に名称変更した事情と似ている。9月は新学期であり、新入生は早朝から軍事教練を課されていた。1カ月実施されるそうで、天安門事件以後の習慣とのことであった。

## 2. 環境を指向する各研究機関



中国輻射防護研究院前にて

3カ所の研究所・大学を訪問して感じたのは、中国でも「環境」がキーワードであり、この分野の研究に熱意を持っているという点である。輻射防護研究院は環境科学研究所という独立の組織を持っており、山東鉱業学院も地球科学系の中に環境保護科学技術研究所を設立している。また、中国鉱業大学では何教授や謝教授が地質工学、岩石力学の立場から各種の環境アセスメントに積極的に関与されており、環境関係の授業や講演も多数行っているとのことであった。

中国では、石炭燃焼による大気汚染のようなすぐにでも対策しなければならない問題と、揚子江のダム建設のように時間的・空間的に壮大なスケールで対応しなければならない問題がある。これらは常に経済性と背中あわせの問題であるが、経済力が向上するに従ってこの方面の研究や設備投資が盛んになることは間違いのないであろう。ちなみに、揚子江では1997年に現在建設中のダムの貯水が開始され、山水画のような長江の風景が見られるのは本年までとのことであった。

## 3. 中国は10年前と変わっているのか

マスコミの報道や最近中国を訪れた人の話では中国は劇的に近代化していると言われるが、筆者は少し違った印象を受けた。筆者は10年前にも中国各地を視察したが、その際は一流ホテルに宿泊して学術協会か何かの係員が「良い」場所を案内してくれた。今回は、訪問先の宿泊所に滞在し、滞在中は周辺の様子も見る事ができた。これらの経験からすると、大きく変わったのは多分北京や上海であって、地方はそれほど変



交流協定調印

わっていないと思われる。上海の空港にしても国際線と国内線では様子がひどく違う。

旅程中輻射防護研究院の楊教授に仏教史跡で有名な「五台山」に案内してもらったが、このような田舎に来て人々の顔を見ていると、10億の民すべてが「近代化」の波に洗わ

れているわけではないことがわかる。太原市近郊の野外実験場を管理している老夫婦の暮らしぶりなどは、近代化とは無関係であった。

中国は北京・上海の大都会、地方の大都市、小都市、農村部という具合に様子の異なる社会が混在していると考えた方がよさそうであり、そうしないと誤った認識に陥ると思われる。これが筆者の結論である。

#### 4. おわりに

輻射防護研究院環境科学研究所とは今後4年間にわたる交流協定を締結し、互いに若手研究者を交換することになった。このことは当協会の国際化の大きな一歩であり、若手職員には自己啓発のチャンスである。このような企画を通して職員の資質が向上し協会が更に発展することを期待したい。